



小牧山

# 戦国に馳せる

滋賀県立安土城考古博物館

学芸員 高木 叙子

第19回 信長文書

## 文書発給のルールと信長

信長ほど、古い秩序や様式を尊重した戦国武将はいないと言え、たいいていの人は嘘だと思われることでしょう。しかし、実際に信長が残した八百通近い発給文書（差し出した文書）を見る限り、それは紛れもない事実です。

現在でも手紙を書く際にはさまざまにマナーがありますが、信長の時代にもより厳しい決まりが存在していました。「書札礼」というものです。

信長の時代、文書を出すときは、相手と自分との関係や内容によって、用いる紙の種類や形・折り方、署名のしかたや宛先の書き方などが細かく決められていました（そもそも自分より目上の人に手紙を出すことは許されていません）。信長は家督を継ぐ前の十六歳くらいから文書を発給していますが、基本的には生涯を通じてこの書札礼を、生真面目に守っています。

## 信長の「しるし」の変化

では信長は、唯々諸々と書札礼に従っていただけだったのでしょうか。答は否!! 信長は逆にこのルールを、自分の権力のあり方を視覚的に示すために利用したと考えられます。

たとえば文書の最後に据えられる発給者を示す印ですが、墨で形を書く花押と、朱や墨をつけて捺す印章が

あります。信長の最初の花押は①で、室町將軍の花押を真似た、父信秀と似た形をしていました。ところが次第に独自の形を取るようになります。⑤の花押は、聖人君主が現れた際に出現する聖獸麒麟を意味すると言われ、信長が將軍候補足利義昭と接触した頃から使われ始めます。



▲信長の花押と印章



▲天正5年5月10日付け織田信長朱印状（滋賀県立安土城考古博物館所蔵）

## 文書の形を利用した信長

一般に、印章は花押より礼が軽いと考えられています。その他にも書札礼には、相手との上下関係を一目で示すことのできるポイントがいくつもあり、文書の形により、相手への敬意や威圧などを言外に含むことも可能でした。信長は権力をつけるに従って、軽い相手には自ら文書を出さなくなり、その形も尊大なものが多くなります。書札礼という既存の秩序を有効に利用していた、したたかな戦略が読み取れます。

単なる変わり者、秩序の破壊者という小説やドラマで流布している信長のイメージとは、だいぶ違うようですね。どちらが真の信長の姿か、もう一度考えてみるのも一興です。

問合せ先 文化振興課(☎ 76 - 1189)